

パーソナリティの段階発達説：第二の誕生とは何か

渡辺 恒夫

(東邦大学理学部生命圏環境科学科)

内面から見られた人格（パーソナリティ）である自己の発達に焦点を当て、人格発達の著しい質的転換点とみなされてきた第二の誕生の謎に肉薄する。Rousseau 以来、第二の誕生は思春期の到来の時期に想定されてきたが、青年期静穏説の台頭によって最近では影が薄い。2節では、自己の発達について考察すべく、代表的な自己発達理論として、Neisser の5つの自己説を検討し、私秘的自己のみが未解明にとどまっていることを見出した。次に Damon と Hart の自己理解発達モデルを検討し、自己の各側面間の発達のズレ（デカラージュ）という知見を得た。3節では、古典的青年心理学で第二の誕生として論じられた自我体験と、その日本における研究の進展を紹介し、4節で、第二の誕生の秘められた核は自我体験であり、その奥には私秘的自己と、概念的自己など他の自己との間の矛盾の気づきがあるという仮説を提示した。5節では、私秘的自己の起源をメンタルタイムトラベルによる自己の二重化に求めるアイデアと、自己理解と他者理解の間のデカラージュを克服しようとする運動そのものが新たに矛盾を生じるといふ、生涯発達の構想が提示された。6節では、第二の誕生のテーマを再び見出すため、一人称的方法による人格発達研究の復権が唱えられた。

【キー・ワード】 自己の発達, 第二の誕生, 私秘的自己, 自我体験, 一人称的発達心理学

1. 序 論

内面から見られた「人格」である「自己」の発達に焦点を当て、人格の段階発達上の転換点と言われてきた「第二の誕生」の謎に肉薄したい。まず、編集部から与えられた題は「パーソナリティの段階発達説」であるが、本文中では「人格の段階発達説」の表記を用いることを断っておく。理科系大学で教えていると、学生たちが心理学を自然科学と対等の科学とは決して見なしてくれないこと、その理由の一つが、心理学とは常識をカタカナ英語に置き換えて科学らしく装っているだけではないかという、疑念にあるらしいことに気づく。人格・性格をパーソナリティに置き換えるのも、その典型ということになってしまいかねない。たしかに、科学の価値中立性の建前からは、価値的な「人格」を避けて「パーソナリティ」を使うと言うと、科学らしく響く。けれども、それならそれで、心理学では「人格」の語を価値中立的に用いる、と断ればすむことではないか。そもそも、あらゆる心理学的概念と同様、パーソナリティもまた、価値を免れ得ない概念である（アメリカにおけるパーソナリティ概念の価値論的含意とその社会的背景については、Danziger, 1997/2005 に詳しい）。心理学から価値をはぎ取ろうとするのではなく、暗黙裡の価値的前提に自覚的になることこそ、必要なことであろう。

次に副題にある「第二の誕生」であるが、言うまでも

なくこれは、Rousseau (1762/1963) の、「人は二度生まれる。一度は存在するために、二度目は生きるために」という『エミール』の言葉に由来する。人格に発達段階があるのであれば、この第二の誕生こそが、人格成長期において最重要な段階変化ということになる。Rousseau にあって第二の誕生とは、青年期の到来を意味した。Freud や Piaget のような古典的な発達理論でも、それぞれ精神-性的発達と知的発達という、発達の全く異なる側面を扱いながらも、等しく、ほぼ12歳前後という青年期到来の時期に、「子ども」からの脱却という最重要な発達段階（Freud の性器期と Piaget の形式的操作期）を置いているのである。Erikson に代表される生涯発達心理学では、青年期には、「子ども」から脱却して「大人」の仲間入りをするためのアイデンティティ確立の闘いと試練の時期であり「危機の時期」という意味が付け加えられる。すでに現代心理学におけるパーソナリティ論の元祖である Allport (1937/1982, p.184) 自身が、青年期の前期である思春期に「上昇的危機」という特徴づけをしている。

ところが一方では現代は、青年期危機説に対して青年期静穏説が唱えられる時代でもある（たとえば、下山, 1998; 滝川, 2004）。青年期とは、近代産業社会に至って、性的生物学的成熟と社会的成熟の間に時間的ギャップが広がったという時代背景の中で形成されたものである以上、滝川の言葉を借りるならば「蝶にとって『さな

ぎ』が普遍的なようには普遍的ではなく、その時代と社会によってさまざまにあり方を変える」(滝川, 2004, p.9) のものである。従って、家父長制の名残や性への抑圧的規範、貧困といった、若者の人生行路を阻む困難が緩和され、それどころか消費社会、情報化社会の主役へと祭り上げられるにつれ、危機、疾風怒濤の時代、としての古典的な青年期像が描きにくくなるのは、当然かもしれない。

では、人格発達上に最重要な段階を画す「第二の誕生」とは、もはや神話でしかないのだろうか。筆者はここで、第二の誕生に相当する概念をキーとして用いた例として、W. James が『宗教的経験の諸相』で、古今の宗教的経験のあり方から、人を一度生まれ型と二度生まれ型に分けていることを思い出す。一度生まれ型が率直に信仰へ向かうのに対し、二度生まれ型は、死と再生の経験にも比すべき回心を経なければならぬ。James (1902/1969) は、「二度生まれの人の性格の心理学的な基盤は、その人の生まれつきの気質のなかにある種の不協和あるいは異質混交があること」と述べて、フランスの作家、アルフォンス・ドーデの例を引いている。

「最初に私が二重人であることを悟ったのは、私の兄弟アンリが死んだときに、私の父が実に劇的に『あれは死んだ、あれは死んだ!』と叫んだときのことであった。私の第一の自己は泣いたが、私の第二の自己は『あの叫びはなんて真に迫っているんだろう。舞台の上だったらどんなに素晴らしいことだろう』と考えた。そのとき私は14歳であった」(James, 1902/1969, p.253)。

James の二度生まれについての考察の示唆するところは二つある。一つ目は、第二の誕生といった経験は、割合の変動はあってもいつの時代でも少数だったかもしれない、従って人格発達には、多様性、または複線型さえも考慮する必要があるという示唆である。青年期危機説と平穩期説の対立も、もともと人格発達は多様なものであることの、表れではないだろうか。

二つ目は、ドーデの事例でテーマとなっているのは自己のあり方であり、人格の段階発達へアプローチするには人格を「自己」として捉えるのがよいのではないかという示唆である。一体、人格と自己との関係をどうとらえるべきだろうか。これには、Allport (1937/1982) 自身が、James における「自己 (self)」と「人格 (personality)」の使い分けを考察している部分で、答を与えている。「自己とは本質的に『内部から見られた』パーソナリティである」(p.37)。これを裏返して言えば、「人格とは本質的に『外部から見られた』自己である」ということになるだろう。

ここで、「内部」「外部」とはどういう意味だろうか。「内面性の神話」といったポストモダンニズム風の批判に足をすくわれないためにも、定義しておいた方がよい。ここ

では「内部から見る」を、「観察者と観察対象が同一であるような視点を取る」と、「外部から見る」を「観察者と観察対象が異なるような視点を取る」と、定義しておく。前者を「一人称的視点に基づく」後者を「三人称的視点に基づく」と、言ってもよい (Watanabe, 2010 参照)。つまり、「自己」は自分自身にたいする観察が元になっている一人称的概念であり、「人格」は他者に対する観察が元になっている三人称的概念なのである。このことは、「あの人は人格ができていない」とは言っても、「私は人格ができていない」とは言わず、むしろ「私は自分というものができていない」と言うことからも分かる。「視点」の違いに基づく区別の導入は、「自己」と「人格」をめぐる概念的な混乱を整理するのに役立つだろう。Allport (1937/1982) は、有名な「人格とは、個人の内部で、環境への彼特有な適応を決定するような、精神物理学的体系の力動的機構である」という定義のより簡明な定義として、「真にその人であるもの」(p.40) をあげている。この三人称的な「その人」を一人称に置き換えれば、「真に私自身であるもの」ということになろう。これはまさに「自己」のことに他ならない。

かくして、本稿の目標がようやく定まった。「自己」の発達途上に第二の誕生というにふさわしい不連続点を見出すこと。そのためにまず次節では、代表的な自己発達論として、Neisser の自己知識論と、Damon と Hart による自己理解の発達論を取り上げて検討しよう。3節では、Neisser の5つの自己のうち未解明にとどまっている私秘的自己への手掛かりでもあり第二の誕生への手掛かりともなる、自我体験についての研究を紹介し、4節では、第二の誕生の秘められた核は自我体験であり、その奥には私秘的自己をめぐる矛盾の意識があるという仮説を提示する。5節では、私秘的自己の起源および、自己理解と他者理解の関係に触れた後、第二の誕生のテーマを再び見出すための方法論にも触れたい。

2. 自己の発達理論

2-1. Neisser の自己知識論

認知心理学の指導者であった Neisser (1988) が、「5つの自己論」を発表して20年以上たつが、その意義はいまだ汲みつくされていないように思われる。認知的アプローチによる自己論として最も洗練された形を示し、かつ、J.J. Gibson の生態的自己のアイデアをも巧みに組み込み、その後の発達の研究に対して指針を提供しているだけではない。以下に見てゆくように、「私秘的自己」という、未だに解かれていない謎をも残したのだった。

Neisser (1988) によれば、自己という謎を明らかにする接近法の一つは、自己についての知識が究極的に依拠している情報を分析することである。その結果、自己を特定する5種類の情報が発見され、それに応じて5種類

の自己が見出されたという。

生態的自己 (ecological self) は、物理的環境に関係して知覚される自己である (すなわち、「私」は、ここに、この場所に存在してこの特定の活動に携わっている人間である)。対人的自己 (interpersonal self) は、生態的自己と同じくらい早く出現し、情動的関係とコミュニケーションの中の、ヒトという種に固有な信号によって特定される (「私」は、ここで、特定の人間的関わり合いの中にある人間である)。時間的拡張自己 (extended self) は、主として我々の個人的記憶と予期に基づいている (「私はある特定の経験を持ち、ある特定の周知の日常活動に携わっている人間である」。私密的自己 (private self) は、子どもが最初に自分の経験の中には他者と共有できないものがあると気づいたときに現れる (「私は、原理的に、この独自かつ特有の痛みを経験する唯一の人間である」) (Neisser, 1988, p.36)。

以上、4種類の自己に、通常、自己概念 (self-concept) と呼ばれている概念的自己 (conceptual self) を加えて、5種類の自己のカatalogができていく。

この5つの自己説は、明に暗に、その後の自己発達研究にも影響を与えているが、奇妙なことに私密的自己の説だけは無視される傾向がある。たとえば、Thompson (2006) によれば、自己は、Jamesの主我の土台をなすところの実存的な自己気づき (existential self-awareness) から始まって、2年目後半には間主観的自己、2年目-3年目初期には概念的自己という順に発達的に出現し、自伝的記憶の発展にともない4歳までに時間的自己が形成されるという (pp.77-81)。それぞれ、Neisserの生態学的自己、対人的自己、概念的自己、時間的拡張自己に相当するだろう。しかしながら、私密的自己に関しては示唆にとどまり (p.84)、具体的な言及がない。また、乳幼児研究で知られるRochat (2003) が豊富な実証研究を背景として略述している人生早期に発達する自己気づきの5水準によると、①出生後の自己と世界の分離、は別として、②2カ月以後の、自己の身体的環境中の位置付けを認識する「位置づけられた自己 (situated self)」の出現、③2年目後半の「客我」(Me)の誕生、④3年目に始まる、「時間を越えて延長する客我」の誕生、と進み、第5水準として「メタ認知的自己気づき」があがっている。しかしこの第5水準の気づきは、「他者が自分について何を知覚し判断するかの想像」といった、自己意識の対人的側面、自意識尺度 (菅原, 1984) でいうところの、「私的自意識」ならぬ「公的自意識」の方に焦点を当てて定義されていて、Neisserの私密的自己に対応するものではない (ただし、成人の自己気づきといえども、これら初期に展開した気づきの5水準のダイナミックな変動から成るとしているのは、参考になる)。

そこで、Neisser (1988) の論文をもう一度読み返

してみる。すると、やはり奇妙なことに気づく。他の4つの自己は、生態的自己がGibson、対人的自己がTrevarthen、時間的拡張自己がTulvingというように、それぞれその分野の代表的な業績を中心として同時代の文献を豊富に挙げて実証的に論じられているのに対し、私密的自己にはそれに対応するような実証的な文献の裏付けが見当たらない。わずかに、4歳の子どもの「秘密」という概念を理解する、といった研究例が2つほど挙げられているだけであり、その代わり挙げられているのが、Jungであったり、はては18世紀の人文学者Giambattista Vicoの文章であったり、他の4つの自己の場合とは大きな対照をなしている。Neisserはまた、西洋の哲学においては私密的自己のみが探究に値すると見なされていたこと。また、私密的自己を重視するか否かは人によって大きな違いがあり、Jungのいうところの外向性者よりも内向性者にとって意味があること、といった興味深い見解を述べている。

ともあれ、Neisserの自己論から私密的自己について汲み取られるところのものは、次の3点である。

①私密的自己が依拠する情報は、経験についての経験といった、自己再帰的な情報であること。②その出現は4-5歳以降と、他の4つの自己に比べて最も遅れること。③その実証的研究が、心理学では殆ど始まってさえないこと。Neisser自身の後期の論文 (1997) でも、他の4つの自己に比べて私密的自己については示唆にとどまっている。④私密的自己を重視するか否かに個人差が大きい以上、他の4つの自己と異なり、私密的自己のあり方じたいに大きな個人差が予想されること。この最後の点は、すでに第二の誕生に関連して述べた、人格発達の多様性にも関係することである。自我の発達もまた、けっして普遍的とはいえず、多様なものかも知れないのである。

ここで、私密的自己の形成と第二の誕生に、何らかの関係があるかどうかを問うてみよう。直ちに起こる疑問は、第二の誕生が思春期とされているのに対し、私密的自己の出現が4-5歳以後では、年齢的に差がありすぎるということだろう。これに関しては前述したRochat (2003) の、成人の自己といえども発達早期に出現する自己意識の5水準のダイナミックな変動として理解できるという示唆が、参考になるだろう。自己と人格の成人に至るまでの発達を、5つの自己の組合せのダイナミズムとして理解すること。そのための手掛かりとして、次節では、DamonとHartによる自己理解の発達論を検討しよう。

2-2. DamonとHeartによる自己理解の発達モデル

自己についての心理学は、周知のように、W. Jamesを出発点としている。しかしながらJames (1892/1939) が、自己を主体としての自己 (self-as-subject) または主

我 (I) と、客体としての自己 (self-as-object) または客我 (Me) に分け、前者を「哲学者のいう純粹自我」であるとし、経験的研究の対象を客我に限定したことは、自己発達研究を、客我中心へ、それも自己概念 (self-concept) 中心へと、偏らせる遠因となったであろう。これに対して Damon & Hart (1988) による自己理解の発達モデルは、客我と主我のダイナミックな相互作用に基づいて自己発達を、さらには人格発達を研究するための突破口を開くものであったと言えよう。Damon と Hart が出発点としたのもまた、James であった。彼らの要約によれば、James は、まず自己を客我 (自分自身のもの) と呼べて、客観的に見ることのできる、物質的・社会的・精神的なものの総計であって、認識されるものとしての自己 (self-as-known) と、主我 (自分の核となる特徴についての主観的認識。認識者としての自己 (self-as-knower)) に分けた上、後者をさらに、次の4つの構成成分から考えているという。(1) 自律性 (agency) : 自分の人生で起こる事に対する自分の自律性への認識。(2) 個有性 (individuality) または個別性 (Distinctness) : 自分の人生体験の独自性についての認識。(3) 連続性 (continuity) : 自分の個人的連続性の認識。(4) 自己省察性 (self-reflection) : 自分自身についての認識の認識 (すなわち個人的同一性の最終的意味づけを形作る自己意識)。また、客我の方も James を踏襲して、身体的自己、行動的自己、社会的自己、心理的自己の4側面に分け、さらに、発達水準としては、(1) 児童期早期 : 分類に基づく同一視、(2) 児童期中期と後期 : 比較に基づく評価、(3) 青年期前期 : 対人的意味合い、(4) 青年期後期 : 体系的な信念と計画、という4水準を立てて、精巧な発達モデルを作りあげている。

彼らの方法は、各側面ごとに代表的な質問をいくつか選んで色々な年齢の子どもに面接し、得られた答をあらかじめ作成されたマニュアルに基づいて4水準のいずれかに配してゆくというものである。たとえば、「(2) 個別性」用の質問の一つは「なぜあなたは他の誰もでないあなたなのですか？」であるが、答は、第1水準「この名前を持つのは私ひとりだから」(分類に基づく同一視)、第2水準「他の誰も知らないことを私は知っている。みんな、私より頭がよいか悪いかのどちらかだ」(個別的特徴についての自己と他者の間の比較)、第3水準「私はユニークであることが好きです。人と違った服も着るし、自分自身であることを恐れませんが…」(心理的身体的特徴の、他者とは異なる独自の組合せ)、第4水準「他の誰も、物事を私が見たり感じたりするのと同じように見たり感じたりしないから」(物事についての独自の主観的経験と解釈)、といった具合である (Damon & Hart, 1988, pp.72-76)。

Damon と Hart のモデルは、Neisser の自己論とは甚

だ異質であるが、各側面の各水準の記述内容を手掛かりに両者を関連付けられないこともない。上記の「個別性」の第4水準など、「私秘的自己」との関連を見て取ることができる (ここで私秘的自己の自己再帰性からして、「自己省察性」により多くの関連が見出されるのではないかと期待されるのであるが、主我の4側面の中で自己省察性のみは、「自己省察性についての子どもの理解を研究するという方法論的困難」(Damon & Hart, 1988, p.138) ゆえ、発達モデルから省略されてしまっている)。ここでも、第4水準がこのモデルでは青年期後期に配されるのに対し、私秘的自己は4, 5歳というように、関連付けるには年齢的隔たりがありすぎるという疑問が生じる。けれども、これは、方法論の違いによるのではないだろうか。たとえば、「自己省察性」(第4水準) と「自己再帰的情報」(私秘的自己) の双方に関係が深いと思われるメタ認知的課題に、内観の発達がある。Flavell, Green, & Flavell (2000) の巧みな実験によると、「ものを考えないように」と教示しておいても考えてしまうという、禅でいう「雑念」への気づきは、5-8歳の間に飛躍的に増大する。このような実験パラダイムでは、生まれたてのほやほやのエピソード記憶が直接つかまえているとあってよい。これに対して、Damon と Hart の調査法では、捕捉されるのはすでに自己定義へと取り込まれた意味記憶である。内観がエピソード記憶になってから、内観能力を自己定義の一部とするまでに長い年月を要しても、不思議ではないだろう。

Damon と Hart のモデルで興味深いのは、各側面が歩調を揃えて次の水準に進むのではなく、各側面の水準にはズレ (Piaget のいうデカラージュ (décalage)) があるということである。たとえば、同じ主我の中でも、連続性と個別性の間には年齢による水準の相関があるが、自律性とこれら2つの間には相関が認められない。このように、デカラージュは常態といってもよいのであるが、極端になれば、青年期の病理をもたすことがある。たとえば思春期拒食症では、他の側面に比べて、自律性だけが極端に低い水準にある。また、青年期の行為障害 (いわゆる非行) では、連続性が極端に低い水準である、等等。このデカラージュのアイデアが興味深いのは、すでに述べた複線型発達観との関連においてである。1側面だけが極端に低い例があるのであれば、逆に1側面だけが全体とは不釣り合いに突出する例もあるのではないかと。そして、A という側面だけが突出する例と B という側面が突出する例とでは、その後の、各側面の相互のダイナミズムによる人格形成の道筋からして、違ってくることもありうるのではないだろうか。

2-3. 方法の問題

自己発達の中に第二の誕生というにふさわしい節目を見出すという本稿の探求にとって、これら代表的な自己

発達論は、どのような示唆を与えるだろうか。このことを検討する前に、いったい、Rousseauの第二の誕生やJamesの二度生まれといった概念が、どのような方法論の元に生まれたか振り返っておいた方がよい。質問して自己定義を引き出すという組織的調査法によってでもないし、ましてや認知心理学的な実験によってでもない。第二の誕生を過去に経験した本人が、そのエピソードを、意味ある自伝的記憶として回想し、自発的に語るから書き記すかした、**自発的回想事例テキスト**に基づいているのである。日記や文芸作品、手紙など回想テキストを資料に用いるというのは、後述のBühlerらの古典的青年心理学で好んで用いられた方法であった。第二の誕生にせよ青年期危機にせよ、方法論的背景の違いを無視して、現代の洗練された調査法や実験法の研究成果の中にその対応物を探し求めても、年齢的に早すぎたり(Neisserの私秘的自己)、遅すぎたり(DemonとHartの自己発達の第4段階)、あるいは青年期危機説が静穏説に置きかえられたりするものも、無理からぬことではないだろうか。次節では、そのBühlerが、第二の誕生に関連づけて提起した自我体験というテーマと、その近年の日本における発展を紹介する。そしてその後、これまで紹介した自己発達論との関係を検討したい。

3. 自我体験の研究

3-1. BühlerとSpiegelberg

まず、Bühlerの著作の中から、「自我体験」が「第二の誕生」に結び付けられている事例を引用しておく。

【事例 ルディ・デリウス】「私は自我意識がどのように始まったかを語りたい。夏の盛りであった。私はおよそ12才になっていた。私は非常に早くめざめた。……私は起き上がり、ふり向いて膝をついたまま外の樹々の葉を見た。この瞬間に私は自我体験(Ich-Erlebnis)をした。すべてが私から離れ去り、私は突然孤立したように感じた。妙な浮んでいるような感じであった。そして同時に自分自身に対する不思議な問いが生じた。お前はルディ・デリウスか、お前は友達がそう呼んでいるのと同じ人間か、学校で特定の名で呼ばれ特定の評価を受けているその同じ人間なのか。——お前はそれと同一人物か。私の中の第二の私が、この別の私(ここではまったく客観的に名前としてはたらいっている)と対峙した。それは、今まで無意識的にそれと一体をなして生きてきた私の周囲の世界からの、ほとんど肉体的な分離のごときのものであった。私は突然自分を個体として、取り出されたものとして感じた。私はそのとき、何か永遠に意味深いことが私の内部に起こったのをほんやり予感した」(Bühler, 1926/1969, p.92. 原文を参照して訳文を変更したところがある。)

Bühlerはこのように引用をした後、さらに、デリウス

スからの次の引用を付け加える——「自我体験は第二の誕生のごときものである。精神的な臍の緒が切れる。われわれはもう環境という母胎の血にほんやりと養われるのではない。血液の循環は今や自分自身の中だけで行われなければならない。自立して鼓動する心臓が生まれる」(p.93)。

この例で、Jamesが引用しているドーデの例と同様、二つの自己の分裂がテーマになっていることに留意しておこう。ちなみに引用されているRudolf von Delius(1878-1946)は、文学者で教育哲学者。この引用からも、ワイマール時代の古典的青年心理学においては、第二の誕生がリアリティをもって語られていたことが伺い知られる。

にもかかわらず、その後、自我体験が欧米諸国で組織的に研究された形跡は見当たらない。ただし、現象学的哲学者Spiegelberg(1964)の「〈私は私だ〉体験」(“I-am-me” experience)の調査研究は注目してよい。彼はまず、近代の文芸作品の中からこの体験の代表例3例を引用して考察したのち、体験の見本例を提示して同様の経験があれば自由記述させるという方法によって、高校生と大学生を対象に、素朴ながら質問紙調査を実施しているのである。以下に、この調査で得られた事例と、Spiegelberg自身の要約的な考察を引用する。

【事例 ハイスクール生徒/女子】私は私だということに気がついたのは、5歳くらいのある日、何もしないでただ座っている時のことだった。私は、なぜ自分は誰か他の人ではなかったのかと、自問自答を始めた。この疑問はその後1週間ほど続いた。その後も時々浮かんだが、最近あまり浮かばなくなった(Spiegelberg, 1964, p.18)。

「多くの子どもたちと思春期の少年少女が、“私は私だ”という、同語反復的に響く言明で表現される突然の体験に襲われる。そして、彼らの多くが、“なぜ私は私なのか(Why am I me?)”という疑問に悩まされる」(Spiegelberg, 1986, p.57)。

これらの引用からも窺えるように、「私は私だ体験」には、Bühlerの「自我体験」とは異なる点がある。第一に、後者は思春期に生じると想定されているのに対し、前者は事例にあるように5歳頃(Neisserの私秘的自己の出現時期!)から思春期頃までと、年齢幅が広く児童期初期まで遡られている。第二に、後者は自我の分裂がテーマであるが、前者では自己同一性の突然の自覚から自己の根拠への問いへ進むという、やや異なるモチーフのように見える。ただし、体験者本人が、そのエピソードを意味ある自伝的記憶として回想し、自発的に書き記す、もしくは質問紙上に自由記述するという方法論には、共通点がある。この回想法を洗練して組織的な調査を進展させ、年齢やテーマの違いという問題にも示唆を与えた

のが、近年の日本における自我体験研究であった。

3-2. 日本における自我体験研究

Bühlerの自我体験が臨床心理学の西村(1978)によって取り上げられて以来、自我体験研究は日本において発展することになった。方法論の進展をとっても、回想事例の偶発的収集に限られていた時代に比べると、高石(1989)によって、多数の質問項目を用意して体験の有無を答えさせると同時に、最初の体験をできるだけ詳しく自由記述させるという方法が開発され、渡辺・金沢(2005)によって「回想誘発的質問紙法」と名付けられて質的研究法として位置づけられたことは大きい。また、天谷(2002)は、中学生に対して半構造化面接を適用した研究を進展させている。回想された体験が自我体験というにふさわしいかという判別の問題も、5項目からなる「判定基準」が作成されたことによって(渡辺・小松, 1999)、解決に向かっている。

自我体験の分類 自我体験は幾つかに分類されることも分かった。たとえば、渡辺・小松(1999)によると、自己の根拠への問い(「なぜ私は私なのか」「なぜ他の誰かではないのか」「私は本当に私なのか」)、主我と客我の分離(「第二の自己が第一の自己と対立している」)、自己の独一性の自覚(「私はほんとうに私なのだ!」)、独我論的懐疑(「世界には私の自己以外に自己は存在しない」という4つの分類が可能だという。これで見ると、Bühler(1926/1969)の事例は「自己の根拠への問い」から「主我と客我の分離」へ展開した例、Spiegelberg(1964)の例は「自己の独一性の自覚」から「自己の根拠への問い」に展開した例と、それぞれみなすことができる。なお、渡辺(2009)は、木村(1973)の現象学的精神医学に学び、独我論的懐疑(独我論的体験と名付けて独立させているが)を、「類的存在としての自己の自明性の破れ」、他の3つを「個別的同一的自己の自明性の破れ」として現象学的に定義し、両者をさらに「自己の自明性の破れ」というコインの両面」として統一的に定義している。

自我体験の想起率 これまでなされた10の調査をまとめた表によると(渡辺, 2009)、20~35%という想起率が、大学生と高校生対象の調査から得られている。ただし、半構造化面接法による中学生への調査では(天谷, 2002)、ほぼ60%という高い率が得られているのは注目に値する。

自我体験は思春期か児童期か 自我体験が初発したと想起される年齢について、西村(1978)は古典的青年心理学に忠実に思春期としているが、その後の組織的調査のデータをまとめると、自我体験の初発時期は、児童期中期一前青年期という小学校の時期に初発年齢のピークがあるが、小学校以前という報告もある一方、中学高校という青年期前期から中期にかけての報告も少なくない

い、という具合である。このようなバラツキに関して、「自我体験に関しては思春期といった特定の発達時期に結びつけるよりも、最低限何歳ごろから可能になるのかという問題を立てるべきかも知れない」(渡辺, 2009)という指摘もある。

自我体験の理論 自我体験とはそもそもいったい何だろうか。渡辺(2009)の所説をまとめれば、「自己が他の多数の自己の間の一つの自己として存在している客観的世界が成立したのち、内省的自己意識の発達にとまない主観的世界が再発見され、客観的世界(に属する自己)と主観的世界(に属する自己)との間に矛盾が生じることによって自己の自明性に裂け目が入ること」ということになろう。

4. 自己発達論に自我体験を位置づける

このように、日本において組織的に研究が展開しつつある自我体験であるが、2節で検討した自己発達論の中に位置づけ可能だろうか。まず次の2つの例を読んでいただきたい。

【事例 麻生武】小学校入学前の五、六歳の頃だったように思う。当時、……アツシちゃんという親友がいて、来る日も来る日も一緒に遊んでいた。……記憶しているのは、アツシちゃんと別れて帰宅してから、家で入浴する際の一場面である。……鏡に映る自分の顔を見てみると、なんとも言えない不思議な問いが私の頭の中に浮かび上がってきたのである。「なぜ僕はアツシちゃんではないのだろうか？僕は、なぜ僕のことしか感じられないのだろうか？なぜ、僕はアツシちゃんと一緒ではないのだろうか？なぜ、僕だけがここにいるのだろうか？なぜ別々に分かれてしまうのだろうか？なぜ、僕は僕だけなんだろう？……」

【事例 20歳/女性】4、5歳の頃は自分の痛みなどの感覚や考えている事などが自分の中でしか(声の様なものとして)聞こえて来ないのがとても不思議で、「どうして私はTちゃんやKちゃんではなく私なのだろう」と思い、どんどんそのように考えていくと、世界中の人は私も含めてひとりぼっちなのだと思っていました。

前者は、心理学者の麻生(1996, p.42)が、「私が発達心理学を志す遠いきっかけになっているように思えなくもない、幼い頃の記憶」と述べて記述している自伝的記憶である。後者は、渡辺(2009, p.173)が調査事例として挙げている例。両例に共通するものは、「他人と自分は内面的に別」という気づきであり、隔絶意識である。しかも、多数の「心をもった人間たち」の中で、なぜか「この人間の心」だけが内的にアクセス可能であることが気づかれて、その根拠への問いが生じている。

いったい、年齢的にいっても二つの事例は、私秘的自己に関わる体験の自伝的記憶を、回想法によって捉えた

ものではないだろうか。「僕のことしか感じられない」「自分の痛みなどの感覚や考えている事などが自分の中でしか（声の様なものとして）聞こえて来ない」とは、Neisserの私秘的自己の定義そのものである。この私秘的自己への気づきが、「どうして他の人間ではないのか」という問いに発展するのは、それが、概念的自己を結節点の一つとしてネットワーク状に構築された客観的世界との間に、矛盾を来たすからであろう。私秘的自己と概念的自己の間の矛盾が意識されることにより、「個別的同一的自己の自明性」が破れたのである。

事態は、「事例ルディ・デリウス」の場合でも同様だろう。「学校で特定の名で呼ばれ特定の評価を受けている」第一の自己とは、他者と比較可能な諸特性を備えた概念的自己のことであろう。これに対して、「第二の自己」として私秘的自己が強く意識され、二つの自己の間の矛盾が、「第二の誕生のごときもの」である自我体験となったのである。こうしてみると、自我体験とは、私秘的自己と概念的自己との矛盾の意識が、自伝的記憶にとどめられ、回想法によってよみがえったものと解釈可能ではないだろうか。実証的研究の困難ゆえにほとんど発展することのなかった私秘的自己の研究に、自我体験研究は手掛かりを与えているのではないだろうか。

では、本節の事例のような私秘的自己形成の年齢に当たる5歳前後から、ルディ・デリウス事例のような思春期や、さらには青年期中盤にまでまたがるという自我体験の初発時期の広がりや、どう解すべきだろうか。ここで、Damon & Hart (1988) のデカラージュのアイデアを想起すべきだろう。自己の発達とはNeisserの5つの自己がダイナミックに相互作用しつつ発達することであると考えてみよう。もしこの発達が調和を保ちつつ進行するならば、複数の自己の間の矛盾といったことは意識されない。たとえ4-5歳で私秘的自己が形成されたからといって、自我体験に直結するわけではないであろう。けれども、調和が何らかの意味で破れ、デカラージュが生じたとき、私秘的自己と概念的自己との矛盾が露呈し、自我体験として自伝的記憶に留められるのではないだろうか。その時期は、事例でみてきたように5-6歳という私秘的自己の出現直後の年齢かもしれないし、自我体験初発のピークとされメタ認知能力が大きく発展する9歳の頃かもしれない（いわゆる「9歳の壁」「10歳の壁」（渡辺, 2011）との同時性）。さらには思春期の到来がデカラージュの引き金を引くかもしれない。そして自我体験がルディ・デリウス事例やドーデの例のように思春期に生じた場合、単なる子どもの頃のエピソードとは異なり人生行路に影響を及ぼす可能性があるだけに、「第二の誕生」という意味を与えられることがあるのかもしれない。このように考えれば、思春期危機説と静穏説の対立に象徴される人格発達の多様性ということにも、異な

る角度から接近できるのではないだろうか。

第二の誕生の秘められた体験核とは自我体験であり、Neisserの自己論を援用すれば、その背後にはさらに、概念的自己と私秘的自己の間の矛盾の気づきがある、というのがここまでのとりあえずの結論である。

5. 残された問題：私秘的自己の起源、自己理解と他者理解

残された問題は数多いが、ここでは私秘的自己の起源の問題、そして自己理解と他者理解の関係について一瞥する。

Neisser自身が私秘的自己についての考察を発展させていないこともあり、その起源について参考となる知見は少ない。私秘的自己の元になる情報である自己再帰的情報を獲得する能力が内観能力であるとして、それが5-9歳の間にほぼ成人並みに発達するという先に引いたデータ (Flavell et al., 2000) 等から、リアルタイムでの実証的接近の困難な私秘的自己がほぼ同時期に形成されるということ、「傍証」することはできよう。けれども、自我発達が複数の自己のダイナミックな相互作用であるならば、私秘的自己といえどもこの相互作用の中から生成したことを示すことができなくてはならない。筆者は、私秘的自己の直接の母体は時間的拡張自己であると考え、Neisser自身は時間的拡張自己について十分な理論的展開を示していないが、代わりに注目すべき理論的発展が、Tulvingの手でなされている。彼は意味記憶とエピソード記憶の区分を提唱したことで知られているが、近年、メンタルタイムトラベルという新たな概念でエピソード記憶を特徴づけるに至った (Tulving, 2005)。過去に関する知識としての意味記憶に対してエピソード記憶を特徴づけるのは、「私が経験した」という暗黙の確信をもって記憶がよみがえることである。このような、自分が経験したという暗黙の確信を伴う意識のあり方は、また、自己思惟的意識 (autonoetic consciousness) とも呼ばれる。自己思惟的意識は、過去に、記憶として向かうだけでなく、未来へも向かう。来たるべき夏休みの海外旅行を思い浮かべる際、私は、自分が経験するだろう情景を思い描くのである。つまり、メンタルタイムトラベルは、過去に對しだけでなく未来に對しても行われる。メンタルタイムトラベルとは、単にエピソード記憶の言い換えではない。エピソード記憶を意味記憶から区別するゆえんの経験の特徴 (= 自己思惟的意識) を抽出することによって、その特徴が過去の想起だけでなく未来への予想にも適用であることを示した、ユニークな着想である。

メンタルタイムトラベルは、基本的に4-5歳頃が可能となる。また、ヒト以外の動物には存在せず、ヒト間でも個人差が大きい。これがTulvingの説である。

メンタルタイムトラベルが時間的拡張自己の成立にとって重要であることは、たやすく見てとれるだろう。筆者はさらに、一步を進めて、「メンタルタイムトラベラー」が過去や未来だけでなく現在時に降り立つことが、私密的自己形成ということではないかと考える。過去や未来への知覚は存在しないので、自己の経験として思い描かれた過去世界や未来世界は一重である。ところが現時の世界はすでに知覚されているため、現時の世界を自己の経験として思い描くことは自己再帰的事態となって世界を二重化させることになる。知覚的現時の世界にはすでに自己が存在しているため、世界の二重化は自己の二重化ともなる。つまり、自己の分裂である。

私密的自己形成のダイナミクスについてさらに理解を深めるためには、自己理解と他者理解を統合的に捉えることが必要である。Neisser (1997) もいうように、生態的自己の知覚は環境世界の知覚と対をなし、対人的自己の知覚は対人知覚と対をなしている。また概念的自己の形成も、Tomasello (1999/2006, p.134) もいうように、共同注意を自己に向けることが契機となる——「子供は、大人が自分に注意を向けるのをモニターするようになる、それによって、自分を外側から見ることになる。それだけでなく大人の役割も同じ外側の観点から把握するので、総合的に言えば、子供は自分自身を役者の一人として含む全場面を上空から眺めているようなものである」。このようにして形成される概念的自己は、個々の特性について他者と比較可能という意味で、公共的社会的なものである。時間的拡張自己でさえ、Neisser (1997) みずから（認知的転回から物語り論的転回へという時代の流れを意識したものか）、「物語り的自己」(narrative self) と名称変更しているように、「去年の誕生日はどうかだった」といった周囲の他者との物語りによって構成されるという意味で、公共的社会的である。そもそも私密的自己じたい、すでに他者の内面という理解が成立していることを前提としている。本節の事例のように「どうして私はTちゃんやKちゃんでないのか」と疑うには、私がTちゃんやKちゃんであるという事態がすでに想像可能になっていなければならない。心の理論説を採るにせよ、シミュレーション説を採るにせよ、自己の内面とは別物としての他者の内面の理解が、そこに成立していなければならないのである。私密的自己の形成年齢が、誤信念課題の通過が可能になる年齢（たとえば、子安・木下, 1997 参照）と並行しているように見えるのは、偶然ではあるまい。

にもかかわらず、私密的自己が他の自己と矛盾を来たすというのは、それが他の自己とは異なり、自己再帰的情報に基づいているからであろう。すでに述べたようにメンタルタイムトラベラーが現在時に降り立つことは、すでに成立しつつある客観的世界の懐のただなかに、主

観的世界をあらためて発見することになる。自己もまた、客観的世界に属する「他の自己たちの間の一つの自己」と、主観的世界の中心としての唯一の自己とに、分裂するのである。この分裂が克服されるためには、他者の私密的自己を認識し、他者もまた各自が主観的世界の中心としての自己であることを理解しなければならない。この理解は思うほどたやすいことではない。なぜなら、他者の私密的自己を理解することには、そもそも矛盾がはらまれているからである。私の自己を認識するという自己再帰的認識は、必然的に自己を二重化する。それが私密的自己の出現と言うことである。ところが他者の自己を認識することは、他者の自己を二重化しないのである。かくして自己理解の発達と他者理解の発達の間には、たえずデカラージュが伴うことになる。デカラージュを克服しようとする運動そのものが、新たに矛盾を生じるのである。それゆえ自我体験もまた、生涯発達のスパンで把握しなければならないのである（渡辺・高石, 2004 参照）。

矛盾を忘れるのではなく向き合うことは、病理へ向かう危うさも秘めているが、宗教的神秘的体験やその他の創造的体験への道をひらくことにもなるだろう。例として、Fromm (1941/1956) や Sartre (1947/1952) によっても自我の発見のめざましい例として論じられた、英国の作家 Richard Hughes (1929/1977) の小説の挿話をあげておこう。8歳の少女エミリーの体験として描写されるこの事例は、のち、Spiegelberg (1964) によって Hughes 自身の5歳の頃の実体験であることが確認されている。

「やがて、エミリーに、かなり重要な事件が起こったのである。とつじよとして、彼女は自分が誰なのかにめざまめたのであった。……何となく蜜蜂と女王の事を考えていると、そのときとつぜん、自分はたしかに自分だということが、心にひらめいたのであった。……こんどこそ自分はエミリーだ……というこの驚くべき事実を確信できた彼女は、真剣にその意味を考えはじめた。第一に、世界中のどんな人間にでもなれたかも知れないのに、自分を特にこの人間、エミリーにするようにしたのは、どういう力なのだろうか？……自分が自分をえらんだのだろうか、それとも神のしわざなのだろうか」(Hughes, 1929/1977, p.119 f)。

ここまでは、引用してきた他の事例と同じ自我体験である。けれどもこの問いの解としてエミリーに訪れたのは、「あたし自身が神ではないのか？」という想念であり、しかも、自分が「もしかして神で——ただの、どこにもいる少女ではないということ」は、「どんなことがあっても、この事実は隠しておかなければならない」(p.123) のであった。これは、「解」としては突拍子もないものに聞こえるが、渡辺（印刷中）の現象学的分析によると、「私は私であるという内的体験によって [エミリーはエ

ミリーであるという客観的世界との間で]世界が二重化したため、私はエミリーであるという自明性が破れ、なぜ私は他の誰かではないのかと言う……問いが生じ、その答えが、エミリーの類例なき特別さに求められた。類例なき特別さと類的存在を二重に生きる化身教義がここに形成され、エミリーは自分が神であることを自覚した。それによって世界の二重化は解消した。」というように解明されるのである。もし、この体験の訪れが思春期であったならば、それは文字通りの第二の誕生として、特異な宗教家を生み出したかもしれない。けれども、恐らくは幼すぎたために、体験者は後年、小説家としてこの記憶を造形するにとどまったのだ……。

6. おわりに

人格発達の著しい質的転換点としての第二の誕生のテーマが見失われてしまったのは、それが、人に語るより日記や回想録に密かに書き留められるにふさわしい、事例エミリーの言葉を借りるならば「どんなことがあっても隠しておかなければならない」ような、私秘的な体験を源としていたからだろう。人文社会科学における物語り論的転回は各種のインタビュー法や会話分析の隆盛をもたらしたが、私たちは、本当に自分の人格発展にとって重要なことは、語られるよりも書き残されるのではないかと疑った方がよい(現代ならインターネットの匿名掲示版もデータソースとして有望である)。研究者自らの自伝的記憶を書き留めたテキストを素材とするような方法の開発こそ、人格の発達心理学にとって必要であって豊かな実りも予想されるのではないだろうか。本稿が、そのような「一人称の人格発達心理学」の復権に役立つようなことがあれば幸いである。

文 献

- Allport, G.W. (1982). *パーソナリティ：心理学的解釈* (訃摩武俊・青木孝悦・近藤由紀子・堀 正, 訳). 東京：新曜社. (Allport, G.W. (1937). *Personality: A psychological interpretations*. New York: Henry Holt and Company.)
- 天谷祐子. (2002). 「私」への「なぜ」という問いについて：面接法による自我体験の報告から. *発達心理学研究*, **13**, 221-231.
- 麻生 武. (1996). 私たちの起源——発達心理学. 佐々木 正人 (編). *心理学のすすめ* (pp.25-50). 東京：筑摩書房.
- Bühler, C. (1969). *青年の精神生活* (原田 茂, 訳). 東京：協同出版. (Bühler, C. (1926). *Das Seelenleben der Jugendlichen*, 3 Aufl. Stuttgart-Hohenheim: Fisher Verlag.)
- Damon, W., & Hart, D. (1988). *Self-understanding in childhood and adolescence*. New York: Cambridge University Press.
- Danziger, K. (2005). *心を名づけること (下)* (河野哲也, 監訳). 東京：勁草書房. (Danziger, K. (1997). *Naming the mind: How psychology found its language*. London: Sage Publisher).
- Flavell, J.H., Green, F.L., & Flavell, E.R. (2000). Development of children's awareness of their own thoughts. *Journal of Cognition and Development*, **1**, 97-112.
- Fromm, E. (1956). *自由からの逃走* (日高六郎, 訳). 大阪：創元社. (Fromm, E. (1941). *Escape from freedom*. New York: Rhinehalt & Company.)
- Hughes, R. (1977). *ジャマイカの烈風* (小野寺健, 訳). 東京：晶文社. (Hughes, R. (1929). *A high wind in Jamaica*. London: Chatto & Windus Vintage, Random House).
- James, W. (1939). *心理学 (上巻)* (今田 恵, 訳). 東京：岩波書店. (James, W. (1892/1961). *Psychology: Briefer course*. New York: Harper Torchbooks.)
- James, W. (1969). *宗教的経験の諸相 (上)* (榊田啓三郎, 訳). 東京：岩波書店. (James, W. (1902). *The varieties of religious experience*. Longmans, Green & Co.)
- 木村 敏. (1973). *異常の構造*. 東京：講談社.
- 子安増生・木下孝司. (1997). 〈心の理論〉研究の展望. *心理学研究*, **68**, 51-67.
- Neisser, U. (1988). Five kinds of self-knowledge. *Philosophical Psychology*, **1**, 35-59.
- Neisser, U. (1997). The roots of self-knowledge: Perceiving self, it, and thou. In J.G. Snodgrass & R.L. Thompson (Eds.), *The self across psychology: Self-recognition, self-awareness, and the self concept* (pp.19-33). New York: Cambridge University Press.
- 西村洲衛男. (1978). 思春期の心理 3 自我体験の考察. 中井久夫・山中康裕 (編), *思春期の精神病理と治療* (pp. 255-285). 東京：岩崎学術出版社.
- Rochat, P. (2003). Five levels of self-awareness as they unfold early in life. *Consciousness and Cognition*, **12**, 717-731.
- Rousseau, J.J. (1963). *エミール (中)* (今野一雄, 訳). 東京：岩波書店. (Rousseau, J.J. (1762) *Émile ou de l'éducation*.)
- Sartre, J.P. (1952). *ボードレール* (白井浩司, 訳). 京都：人文書院. (Sartre, J.P. (1947). *Baudelaire*. Paris: Gallimard.)
- 下山晴彦 (編). (1998). *教育心理学II*. 東京：東京大学出版会.
- Spiegelberg, H. (1964). On the 'I-am-me' experience in childhood and adolescence. *Review of Existential Psychology and Psychiatry*, **4**, 3-21.
- Spiegelberg, H. (1986). *Steppingstones toward an ethics for fellow existers: essays 1944-1983*. Dordrecht/Boston: Martinus Nijhoff Publishers.
- 菅原健介. (1984). 自意識尺度 (self-consciousness scale)

- 日本語版作成の試み. *心理学研究*, **55**, 184-188.
- 高石恭子. (1989). 初期及び中期青年期の女子における自我体験の様相. *京都大学学生懇話室紀要* 第19巻, 京都大学, 京都, 29-41.
- 滝川一廣. (2004). *新しい思春期像と精神療法*. 東京: 金剛出版.
- Thompson, R.A. (2006). The developmental of the person: Social understanding, relationships, conscience, self. In N. Eisenberg (Ed.), *Handbook of child psychology: Vol.3. Social, emotional, and personality development* (6th ed., pp.48-98). New Jersey: John Wiley & Sons.
- Tomasello, M. (2006). *心とことばの起源を探る* (大堀壽夫・中澤恒子・西村義樹・本多 啓, 訳). 東京: 勁草書房. (Tomasello, M. (1999). *The cultural origins of human cognition*. New Jersey: Harvard University Press.)
- Tulving, E. (2005). Episodic memory and autoevidence: Uniquely human? In H.S. Terrace & J. Metcalfe (Eds.), *The missing link in cognition: Origins of self-reflective consciousness* (pp.3-56). London: Oxford University Press.
- 渡辺恒夫. (2009). *自我体験と独我論的体験*. 京都: 北大路書房.
- Watanabe, T. (2010). Metascientific foundations for pluralism in psychology. *New Ideas in Psychology*, **28**, 253-262.
- 渡辺恒夫. (印刷中). 自我体験研究への現象学的アプローチ. *質的心理学研究*, **12**.
- 渡辺恒夫・金沢 創. (2005). 想起された〈独我論的な体験とファンタジー〉の3次元構造: 独我論の心理学研究へ向けて. *質的心理学研究*, **4**, 115-135.
- 渡辺恒夫・小松栄一. (1999). 自我体験: 自己意識発達研究の新たな地平. *発達心理学研究*, **10**, 11-22.
- 渡辺恒夫・高石恭子 (編). (2004). *〈私〉という謎: 自我体験の心理学*. 東京: 新曜社.
- 渡辺弥生. (2011). *子どもの「10歳の壁」とは何か*. 東京: 光文社.

Watanabe, Tsuneo (Department of Environment Science, Faculty of Science, Toho University). *Stage Theories of Personality Development: The Enigma of the "Second Birth"*. THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2011, Vol.22, No.4, 408-417.

Focusing on the development of the self, the inner side of the personality, this study elucidated the enigma of the "second birth" which was once believed to be an important turning point in the development of the personality. First, we reviewed Neisser's theory of "five selves," one of the most representative theories of the self. This review suggested that among the five selves, the "private self" has not been empirically investigated to date. Second, the study of the "I-am-me" experience was introduced. This experience had been discussed in German youth psychology as a second birth, and several Japanese psychologists are currently investigating this phenomenon. Third, by comparing the private self and "I-am-me" experience, it was concluded that the latter experience might originate from a conflict between the conceptual self and the private self. When "I-am-me" experiences occur simultaneously with the advent of adolescence, the experience might be recalled as a second birth. Finally, this paper discussed the first-person psychology of personality development, which is necessary to revive the theme of the second birth.

[Key Words] Development of self, Second birth, Private self, "I-am-me" experience, First-person psychology of personality development

2011. 7. 4 受稿, 2011. 9. 13 受理